

日本の原風景－棚田・段々畑のルーツを探る

大田市・湯里天神遺跡 調査年：2009（平成 21）年

岩橋 孝典

2009 年の夏、珍しく冷夏になったこの時に、私は大田市温泉津町の湯里天神遺跡の発掘を担当していました。温泉津町湯里では初めての発掘調査ということでどのような遺跡が見つかるのか期待しながら掘り下げていくと、まず室町時代頃の陶磁器や土器が見つかりました。もう少し掘り下げると、帯状に土の高まりと溝状の凹みが交互に並んでいるものが見えてきました。これが畑の畝であることが分かったとき「中世の畝がこんなにもよく残るものか！」と驚いたことを覚えていません。

そして、畝の下からは牛馬に曳かせた犁耕の痕跡も見つかりました。これだけでもなかなか面白い発見ですが、畑の北端からは石が東西に一列に並んで出てきたのです。「いったい、何だろう？」と不思議に思い、どのぐらい下に続いているのか小さなトレンチを掘って確かめました。掘り進めたところ石は 10～50 cmほどの大きさのものを使って、高さ 20～30 cmほどに積み上げられていました。この石列を追跡していくと調査区の中では全長 9 m 近くが確認されました。最終的に現れたのは 15 世紀に造られた「石垣を用いた段々畑」だったので、畑土の中からは室町時代の輸入陶磁器の破片なども見つかり、近隣に国人領主・温泉氏に関わる居館などの存在も想定され、石見銀山が開発される直前の湯里の状況を知ることができる成果の多い調査と



湯里天神遺跡の段々畑と石垣

なりました。

石垣は戦国時代(16世紀)になって、寺院や城郭の普請に用いられるようになったと考えられてきました。ところがそれをさかのぼる時代の、しかも農耕地に石垣が用いられていることは、傾斜地の農地開発史を考える上で驚くような発見だったのです。

山間部の多い中国地方では、圃場整備の進んだ今でも石垣を用いて区画した棚田や段々畑が数多く見られます。このような景観は農地開発の進んだ江戸時代以降に形作られたものと考えられていましたが、それをさかのぼる室町時代には、既に出現していたということは農地開発に懸ける農民達の技術力や情熱を改めて見直さなければならないと思ったのです。

日本人が思い浮かべる農村の原風景に棚田や段々畑はよく馴染むものですが、その景観がいつ頃から形作られてきたのかを考えると、湯里天神遺跡の発見は重要なヒントを与えてくれたのです。

(島根県文化財課世界遺産室企画幹)

【ひとくち情報】

湯里は温泉津港の開発を担った温泉氏の本貫地で、温泉城跡や温泉氏墓所などの遺跡があるほか、石見銀山遺跡にも近いなど中世には要地として知られていた地域である。